

時は、外ろじの入口の外迄迎に出、常の客には入口の戸少し明掛おく、其時は客案内におよばず明て待合迄入る、客揃ふとき、亭主中潜迄迎に出る、外ろじ内ろじの仕様廣狭、諸事習多し、其内、外ろじは何之様子も無之、狭く陰氣にいたし、中潜を明け内ろじを見込とき、景氣改り氣轉る心持肝要然るゆへ内外不似様にするもの、よし、委細は口傳、但待合といふ事は無之、ゆへ、入口の外に輕き腰掛計するは、むかしより自然に有之由云つたふ、

〔翁草 三十八〕一或人數寄屋庭の物好を利休に尋しに、古詩一句にて答ふ、青苔日厚自無塵、又遠州へ尋しに、朧月海すこしある木間哉と答られ、又宗旦に問ば、心とめて見ればこそあれ秋の山ちかやにまじる花の色々、物好は心々に替る事斯なん、利休は幽玄に奇麗也、遠州は閑靜に物さび、宗旦は侘體餘りて、細かに心付しとふるき書捨に在、

〔茶譜 一〕一利休流路地ハ、在郷ノ側ニ、古森ノ陰ニ、隱遁者ノ菴室ヲ仕テ居ルト見ルヤウニ、藪ヲ植細イ道ヲツケテ、竹ノシホリ戸、或ハ猿戸ヲ立、侘テ靜カナ體ナリ、石頭爐并手水鉢、苔ツキ殊勝成體ナリ、飛石モムサク無之ヤウニシテ、キラ／＼磨コトハ無之、植木ノ下ハ篠芝ノ其間々ハ木ノ葉ヲ蒔、木ノ葉ハ柏、椋ノ葉、松葉、加様ノ類取集テ蒔、山出シノ木葉ニ塵ノナイヤウニシテ蒔、其森ノ大木ノ木葉風ニ散テ、土モ不見ト云ゴトシ、道筋バカリ掃ノケテ和ニ見ヘシ、

〔茶傳集 十三〕一露地取様の事、元來露地は天然のあり様なれば、其所の次第によるゆへ云がたし、書付にも仕がたく、露地にて庵主の心中知る、ともいふ也、先道の付様、水打口、勝手の方へ行やう道を付數、奇屋へは立寄様にしてこそ、露地物深くのこる心ありて、一段と意味淺からず候、數奇屋へ直に道を付、とまりたる所にスキヤありては、露地淺く詰りて惡し、されど其とり様なりがたき、狭く詰たる地もあるもの也、ひたすらにも云がたし、只鍛鍊の所にあり、狭くて廣くも見へ廣くてせばくも見ゆるもの也、能々勘辨あるべしとの仰三〇細川齋也、